

都道府県名	佐賀県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	小城町立三里小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	10
児童数	16	18	14	17	15	19	0	99	

研究の概要

1. 研究主題

「自ら学び、自ら考え、学ぶ喜びを味わう子ども」をめざして  
 - 国語科を中心に基礎・基本の定着を図る指導の工夫 -

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・国語  
 児童の言語生活全体から見た実態とNRT検査の結果から国語の基礎・基本を定着させる必要があるため

(2) 年次ごとの計画

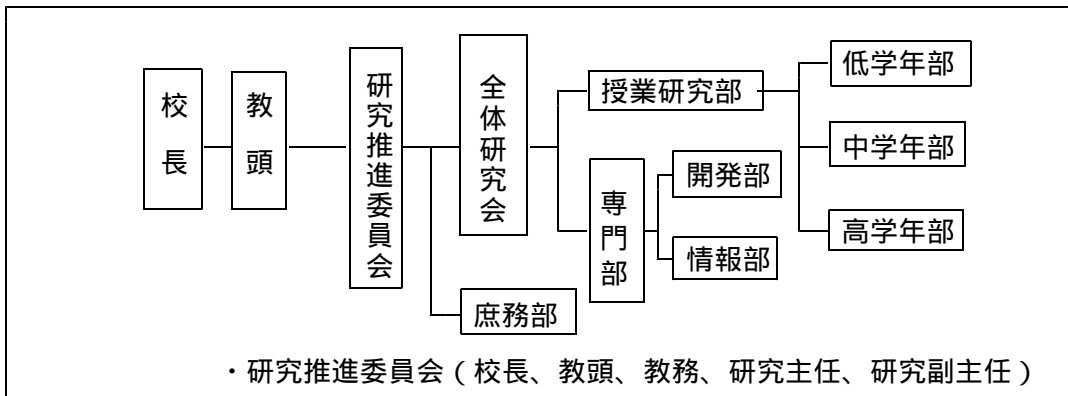
平成14年度	<p>テーマ 国語科における基礎・基本の定着を図る指導の工夫</p> <p>研究の見通し（仮説） 国語科において、子どもの能力・適性あるいは、関心・意欲などの実態に配慮しながら、言葉にこだわりを持たせ、一人一人の言語能力を高める場を設定すれば、基礎・基本が定着し、自ら学び、自ら考え、学ぶことの喜びを味わう子どもになるであろう。</p> <p>研究の内容・方法          (1) 国語科における基礎・基本の定着を図る指導の工夫              「読み」（説明文）を中心とした授業研究              短文（短作文）作り              ・短作文作りの能力を高めるための工夫              語句シートづくり              ・言葉や語句にこだわりをもたせる工夫              個に応じた指導の工夫              ・少人数授業やTTによる授業の改善・開発          (2) 他教科・領域における学力向上のための研究              読書タイムの充実              音読・朗読・群読の工夫              計算力を高めるための「3分スキル」              生活実態把握調査</p>
--------	---

平成15年度	<p>テーマ 国語科を中心に基礎・基本の定着を図る指導の工夫</p> <p>研究の見通し（仮説）・・・変更点とその理由          昨年度立てていた仮説は、国語科の授業研究のみに絞っていたが、研究の内容に他教科・領域における学力向上のための研究をあげていたため、今年度の研究を進めるにあたっては、もう一つBの柱を立てて研究を進めた。          A. 児童の発達段階に応じて、明確な目的をもった言語能力を高める場を設定すれば、語意識が高まり、言語感覚が磨かれ、国語科における基礎</p>
--------	---

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本の定着に有効に働くであろう。</li> <li>B．他教科や領域の中に学力の土台となる環境や活動・訓練の場を設定しそれらを充実させていけば、学習全般の意欲を喚起し、「確かな学力」へと発展していくであろう。</li> </ul> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>A．言語能力を高める場の工夫 <ul style="list-style-type: none"> <li>説明文単元において、「ものの見方・考え方」を育てるための系統的、螺旋的、反復的指導の工夫</li> <li>短文・短作文作り</li> <li>「で・と・に」学習を取り入れた授業展開の工夫</li> <li>個に応じた指導の工夫</li> <li>評価を生かした指導の工夫</li> </ul> </li> <li>B．学力の土台となる環境や活動・訓練の場の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>読書タイムの充実</li> <li>国語スキルタイムの設定</li> <li>計算力を高めるための「計算3分スキル」の充実</li> <li>地域・家庭との連携</li> <li>表現活動（オペレッタや総合表現）の取組</li> </ul> </li> </ul>
--	--

平成16年度	<p>テーマ 国語科を中心にひびきあう授業の創造をめざして</p> <p>研究の見通し（仮説）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>A．児童の発達段階に応じて、明確な根拠をもった言語能力を高める場を設定すれば、よい表現の使い手としての力が育ち、互いに学び合う喜びを味わうことができるであろう。</li> <li>B．他教科や領域の中に学力の土台となる環境や活動・訓練の場を設定しそれらを充実させていけば、学習全般の意欲を喚起し、「確かな学力」へと発展していくであろう。</li> </ul> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>A．言語能力を高める場の工夫 <ul style="list-style-type: none"> <li>説明文単元において、「ものの見方・考え方」を育てるための系統的、螺旋的、反復的指導の工夫</li> <li>短文・短作文作り</li> <li>「で・と・に」学習（社会的相互作用）を取り入れた授業展開の工夫</li> <li>個に応じた指導の工夫</li> <li>評価を生かした指導の工夫</li> </ul> </li> <li>B．学力の土台となる環境や活動・訓練の場の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>読書タイムの充実</li> <li>国語スキルタイムの設定</li> <li>計算力を高めるための「計算3分スキル」の充実</li> <li>地域・家庭との連携</li> <li>表現活動（オペレッタや総合表現）の取り組み</li> </ul> </li> </ul>
--------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

A. 言語能力を高める場の工夫における成果について  
 説明文単元において「ものの見方・考え方」を育てていくうえで、言語としての教育の観点を見通し、言葉に着目させ、表現のよさに気づかせていくことで国語学習に対する意欲の高まりが見られるようになってきた。また、説明文の構成分けが早くできるようになり、観点にしたがった言葉に着目することで内容理解も深まってきた。  
 短文・短作文作り  
 授業の中では、教材文にそった形で短文を作らせた方が、授業の流れを壊さず、理解をより深めることにつながった。短文にする問題も各学年で作成した「めあて表」のめあてを意識しながら児童に提示することができ、よりめあてにせまる文を書くことができるようになってきた。  
 「で」学習（一人学び）において一人一人にキーワードの線引きや小見出しつけなどをさせて十分に考えさせたうえで「と」学習（話し合い活動）に入ると、どの子も学習に参加し自分の考えを述べるできるようになってきた。  
 個に応じた指導の工夫ということで、TTを国語の授業でも取り入れた。T2が発表のモデルとなったり、意識を集中させ課題をもたせたり、T1の発問をより分かりやすく言い換え問題を明らかにさせたり、児童の思考をゆさぶったりと様々な形で授業に入り、TTが効果的に機能するようになってきた。

CRTで見る成果（全国を100として）

研究の中心である「読むこと」と「言語事項」についての2年間の変容をみてみた。わずかであるが中学年、高学年に伸びが見られる。2年生においては、個人差が1年時よりさらに大きくなり、個に応じたきめ細かな指導をしていく必要がある。

読むこと	1年	2年	3年	4年	5年	6年
H14 2月	95	100	91	106	85	
H15 2月	124	84	90	99	106	93
言語事項	1年	2年	3年	4年	5年	6年
H14 2月	100	103	95	104	93	
H15 2月	104	85	103	100	106	96

B. 学力の土台となる環境や活動・訓練の場の充実について  
 親子読書タイムを家庭で設けてもらうことにより保護者の意識が高まっている。また、職員による読み聞かせも読書への関心を高めている。  
 国語スキルタイムの設定により漢字の書き取り、音読、短文作りの力がついてきている。  
 計算力を高めるための「計算3分スキル」で多くの子どもができる喜びを味わい、計算の処理能力が高まってきている。  
 学力向上に対する学校の取組を理解し、家庭での生活習慣や家庭学習などに関心が出てきている。  
 表現活動（オペレッタや総合表現）を取り組むことで自分を表現する喜びやみんなで一つのことを成し遂げる達成感を味わうことができた。

2. 今後の課題

3年間の指定を受け、これまで2年間、国語科を中心に基礎・基本の定着をめざして研究を進めてきたが、児童の変容をNRTやCRTの検査においてある程度の成果としてデータに見いだすことができた。最終年度としては、研究テーマに掲げた「自ら学び、自ら考え、学ぶ喜びを味わう子ども」をめざして基礎・基本をふまえながら、「ひびきあう授業の創造」というサブテーマのもとに取り組んでいくことになる。

今後の課題としては次のようなことが上げられる。

「と」学習において社会的相互作用のある話し合い活動にしていくには、どのような発問やどのような「で」学習（一人学び）を仕組んでいけばいいのか。

素材研究と児童の実態調査等を十分ふまえたうえで、具体的な手だてがアイデアにとどまらず、明確な根拠をもつようにする。

短文作りをさらに充実させ、「書く活動」に「読み」から学んだ表現方法を取り入れることができるようにする。

学力向上に向けた様々な取組のさらなる充実を図る。

- ・読書タイム
- ・国語のスキル
- ・計算3分スキル
- ・表現活動
- ・地域や家庭との連携

フロンティアスクールとしての成果の普及を図るため、授業公開等の工夫をする。

#### 学力等把握のための学校としての取組

定期的な学力調査を年2回実施

N R T実施（国語・算数）

・目的：全国学力水準と比較して相対的に学力を把握するため。  
（確かな学力をみる。）

・時期：4月中旬

C R T実施（国語・算数）

・目的：客観的な目標到達基準で到達度を診断するため。  
（基礎的・基本的な学力をみる。）

・時期：1月下旬

短文作りにおける児童の作品変容調査（2月下旬）

児童の短文作りの成果を確認し合い、これからの課題を見いだすために、各学年のめあてに照らし、特によかった作品にコメントをつけて出し合い、全員で検討している。

計算3分スキルにおける児童の変容調査（1～2月）

・目的：基礎的な計算や処理能力の育成を図る。

・内容：四則計算を個や学年に応じて問題数を変えて、3分間に何題計算できるかをタイムを採り、自己の記録に挑戦させている。

#### フロンティアスクールとしての研究成果の普及

研究会、説明会等の開催実績及び開催予定

6月10日 公開授業（4年生国語）

・対象：町内の小・中学校教職員

・目的：本校の研究を知ってもらい町内の連携をとるため

10月24日 公開授業（5年生国語）

・対象：佐城教育事務所管内の小学校、県内のフロンティアスクール、地域の方々及び保護者、教育事務所、県・町教育委員会

11月21日 公開授業（1年生国語）

・対象：佐城教育事務所管内の小学校、県内のフロンティアスクール、地域の方々及び保護者、教育事務所、県・町教育委員会

研究成果普及のためのHP作成、パンフレット作成等の実績（学校としての創意工夫を含む）及び今後の予定

HPに授業公開のときの学習指導案掲載

短文作りのための各学年のめあて表を作成（公開授業参観者に配布）

接続語の系統表を作成（公開授業参観者に配布）

来年度の公開授業の計画をHPの案内欄に掲載予定

来年度初めの学校説明会では、2年間の取組の成果を示しながら学力向上に対する理解を深め、地域・家庭での取組をさらに強化してもらうように提案していく。

フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績予定

6月の授業研究会を町内小・中学校に呼びかけて実施

公開授業のとき、研究協議会で本校の研究の内容を理解してもらうために概要を説明した。

来年度も本年度同様公開授業時には研究の成果を発表し広めていきたい。

研究成果の普及活動の成果（他校への反響等）

本校の取組が町内で多少関心ををもたれるようになり、中学校の教師においては国語科における連携を意識しての参観が見られるようになっている。

定期的な授業参観に加え、公開授業のときの保護者や地域の方々の参観が増え、学力向上を目指す本校の取組に関心と理解を示してもらっている。

